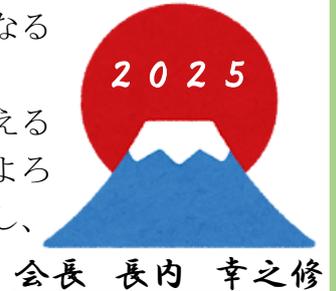


第2号 共防連だより

発行日：令和7年 1月31日
青森県りんご共同防除連絡協議会

新年のご挨拶

謹んで新春をお祝い申し上げます。旧年中は、共防組織活動に対する多大なるご尽力をいただき、誠にありがとうございました。本年も県共防連一丸となり、共防組織の維持・発展に注力し、10年、20年先も安定したりんご生産を行える環境を作りあげていきたいと思っております。本年も変わらぬお引き立ての程よろしくお願い申し上げます。未筆ながら皆さまのご健康とご多幸を心よりお祈りし、新年のご挨拶とさせていただきます。



令和6年産りんごを振り返る



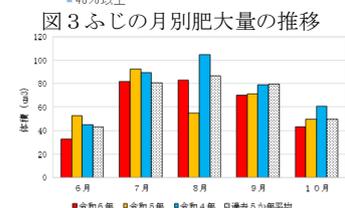
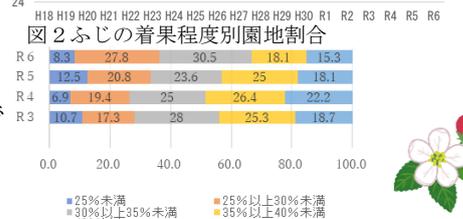
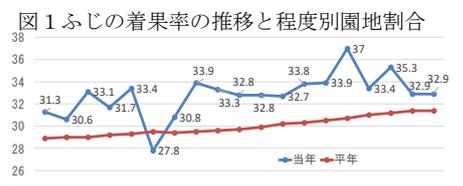
令和6年は、前年と同様、気象変動が大きく、3月から生育期間を通じて記録的な高温干ばつに見舞われ、りんご栽培にとって多難な年であった。今回は結実・着果などりんごの生育に及ぼした影響について振り返る。

りんごの生態は**開花・満開・落花**とも10日程度早まり、開花は観測史上第4位を記録した。開花期間中は比較的好天に恵まれたが、**結実**は県が県内89園地で調査した結果によると、ふじは花そう結実率が40.4%、中心花結実率が35.6%と50%を下回り、結実量の低さが目立った。着果程度別園地割合では、花そう結実率が30%未満の園地が25%程度みられるなど、園地によってばらつきが大きかった。その要因として、前年の夏場の高温干ばつに恒常化している摘果の遅れと成らせ過ぎが重なり、樹や枝によって花不足がみられたほか、9月以降も高温が続いたことから花芽の充実不良による弱小芽の発生が多かったことがあげられる。また、開花期間中の高温乾燥により柱頭が乾いたことやマメコバチなどの訪花昆虫の数が少なく、活動が低下したことなどが指摘された。

特に、**マメコバチ**は「巣箱を設置した時はちらほら飛んでいたが、花が咲いた時は全然飛んでいなかった」、「試しに割ってみたアシガヤのなかには蛹や成虫の死骸があり、コナダニの被害もみられた。」といった生息密度の低下が農家から聞かれた。

着果量は、7月上旬に県が実施した着果状況調査結果によると、ふじの平均着果率は32.9%で、着果率が30%を越えている園地割合は6割以上を占めており、例年どおり着果過多の傾向にあった。また、本年は園地によっては結実率の低さから中心果だけでは着果量を確保できなかった。(図1、2)

果実肥大については、開花が早まったことから初期発育は順調であったが、6月に入ると干ばつ傾向となり、肥大の進みは一時的に鈍化した。その後回復傾向を示したものの、8月に入ると高温干ばつにより10日毎の肥大量は平年を下回り、収穫時には果実の大きさはほぼ平年並みとなった。(図3)生産現場では、着果量や果実肥大にばらつきが大きく、中心果の結実不足に陥ったところは側果を残して着果量を確保した。



しかし、側果の肥大が想定よりも進まず小玉生産を余儀なくされたことから、令和5年より収量が減少した園地が多く見受けられた。

品質面では令和5年に多発した果点荒れやひび割れ果がみられたが、つる割れは少なく、糖度の高い良食味のりんごが生産された。



〈ナシマルカイガラムシ〉

病害虫では褐斑病や**ナシマルカイガラムシ**の被害が目立った。

地球温暖化が進行している中で、ここ数年は生産量の変動が大きく、特に高温干ばつが大きな影響を与えている。生産の安定を図るためには、今一度りんご栽培の原点に立ち返り、自園の生育ステージを基本とした用意周到な栽培管理が求められる。令和7年は、結実にバラつきが生じたことを重く受け止め、結実確保に全力をあげ、マメコバチの増殖など飼養管理や花粉の採集など人工授粉の体制づくりを構築していくとともに、適期適正着果に心がけ、良品果の生産に尽力しよう。また、今年の冬は大雪に見舞われ、主枝の裂開や枝折れなどの被害が既にみられている。減収につながらないように樹上の雪下ろしや枝の掘起のほか、野ネズミ対策も徹底し、雪害からりんご樹を守ろう。

モモシクイガ防除の徹底に向けて、産地一丸となって**コンフューザーR**を設置しよう！

近年、各種害虫の薬剤抵抗性が発達していることや有機リン剤の販売中止に伴い選択できる殺虫剤の種類が減少している。また、地球温暖化が進み、令和5年のような高温干ばつの条件下にあっては、15日間隔の散布体系では台湾の輸出検疫害虫であるモモシクイガの防除に苦慮するなどの事態が生じている。こうしたことから、令和6年りんご病害虫防除暦の基準薬剤には、交信攪乱剤「**コンフューザーR**」が採用された。県の発表によると、**普及促進のぼり**本年度の普及面積は県全体の約25%にあたる約5,000haとなった。本協議会が実施したアンケート調査によると回答した299共防のうち、コンフューザーRを設置した共防は148共防で、設置面積は約1,300haとなった。本協議会では、県や全農等と一体となり引き続きラジオCMや普及促進のぼり作成のほか、病害虫防除研修会で本剤の効果発信を行う等、普及拡大に取り組んでいく。まだ未導入の共防は、令和7年度の積極的な導入を検討していただきたい。



～次世代の共防リーダー～若手組合員育成研修の様子をお届け！

昨年、本協議会では次世代の**共防組織リーダー**を育成するため、これまで2回の研修会を開催した。研修では、近年注目されている高密度植わい化栽培の基本技術をはじめ、先進地であるイタリア南チロル地方の栽培動向のほかスマート農業技術、これまでの共防組織の歩みと方向、農業機械の安全操作など、今後の共防組織リーダーに必要なことを重点的に取り上げた。参加された若手組合員の方々にお話を聞くと、「時代に合った栽培技術を学ぶよい機会であった」、「共防組織の役割と今後の在り方について考えるきっかけとなった」等、称賛の声を数多くいただいた。本研修については来年度以降も継続的に開催していく予定のため、**将来の共防組織を担う**熱意のある皆様の参加をぜひともお願いしたい。

※令和7年度の開催内容については、検討中のため決定次第、地区連事務局を通じてお知らせいたします。(研修内容のご要望についてもお待ちしております。)



イタリア南チロルのりんご栽培

～世界の高密植わい化栽培のいま～

9月23日から29日にかけて、青森県りんご果樹課主導のもと、高密植わい化栽培が広く普及している『**イタリア南チロル地方**』のりんご栽培を視察してきたため、このことについて本紙にて紹介する。

イタリア南チロル地方とは



イタリア特集
第1弾



ボルツァーノ自治県は、イタリア共和国トレンティーノ＝アルト・アディジェ特別自治州に属する2つの県のうち北側の県である。県都ボルツァーノを中心とするこの県域が南チロルと呼ばれている。イタリアでは唯一、3つの公用語を併用する県で、県民の母語は、ドイツ語が最も多い。

イタリアのりんご生産量は**世界第7位**（2022）の225万6000トンで生産面積は約70,000haに及ぶ。中でも、南チロル地方は約18,500haで、イタリア全体の26%を占め最大のりんご産地となっている。

気象条件は年間300日ほどが晴れの日、生育期間中の降水量も400mm程度で、りんご栽培に適する条件となっている（青森県：晴れの日年間170日程度、降水量700mm程度）。

りんごは家族経営がほとんどで、栽培面積1ha未満が34%、1～2haが16%、2～3haが15%、3～5ha以上は20%、5ha以上は15%程度と小規模経営が多い。

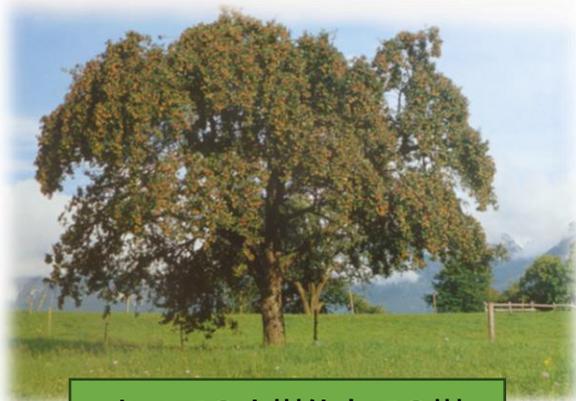


なぜ高密植が広がったのか



1960年代、イタリアのEU加盟をきっかけに、過剰生産による果樹の価格競合によりイタリア南チロル地方の果樹産業が危機的な状況に陥ったため、収量性の低さや作業の非効率性などが問題視されていた大樹疎植栽培から脱却する必要があった。1970年代に入り、この危機的状況を打開するため、限られた面積で反収を向上させるM.9台木を用いた密植栽培へ切り替えるための取組が始まった。導入当初は、樹勢が弱くトマトのような樹姿を見て、批判的な意見が多く、思うように普及が進まなかったが、関係者・関係機関の努力と早期高反収のモデル園の成果により、導入面積は急速に拡大し、今日ではほぼすべての園地が高密植で栽培されている。こうした大樹疎植栽培からの脱却がうまく進んでいなければ、小規模農家の経営は立ち行かなくなっていたという。

平場ではりんご、傾斜地では醸造用ぶどうの園地があたり一面に広がっている



かつての大樹仕立ての樹



南チロルの産地風景

高密植わい化栽培の実際

南チロルで栽培されている主なりんご栽培品種は、ゴールデンデリシャス、ガラ、レッドデリシャス、ふじ、グラニースミス、クリプスピンク等である。その他多様な品種が栽培され、クラブ制品種も多い。また、園地の標高によって栽培に適した品種が異なっている。標高 250m 程度の地帯ではガラが 5 割を占め、次いでピンクレディ、ふじ、グラニースミスが多く、ギガ (ベルギー)、レッドポップ (イタリア)、コスミッククリスプ (アメリカ) といった新たなクラブ制品種も増加傾向である。標高 500 ~1000m の地帯ではゴールデンデリシャスが 5 割を占め、レッドデリシャス、ガラ、ピノーヴァ、アンブロシア、エンビィ、コスミッククリスプが多い。



南チロルで栽培されている
多種多様な品種

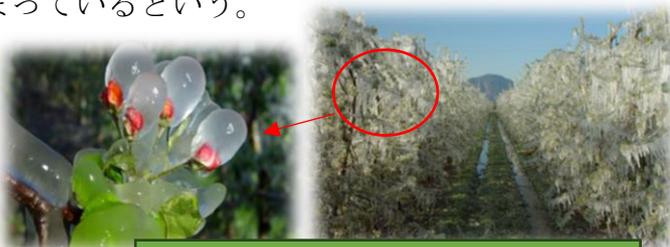


現地の市場で並ぶ
様々な品種のりんご



イタリア、特に北部 (ポー川周辺、南チロル含む) は、世界的に見ても**雹害**が特に多い地域であり、年間 35~50 日の降雹があるという。場合によってはゴルフボール状の降雹もみられることから、**防雹ネット**の設置が推奨されている (今日では約 8 割の園地が設置)。また、南チロルでは、雹害と並んで**霜害**もかなり問題視されており、果樹栽培地帯に約 150 ある観測地点のデータを活用しながら、普及組織が会員向けにスマホの気象アプリを提供し、生産者は最寄りの気象データ・霜害危険警報を受信できるような体制がとられている。また、霜害対策として**スプリンクラー**を使用した**散水氷結法**が普及している。

様々な災害対策として園地設備を充実・進化させているが、驚くべきことに**防雹ネット**や**トレリス** (鉄筋コンクリート製)、スプリンクラーの設置や苗木等全ての資材を合わせた開園費は約 100 万円 / 10 a 程度にとどまっているという。



スプリンクラーを利用した散水氷結法



防雹ネットとコンクリート支柱

<編集後記>

今回は、令和 6 年産りんごの生育を中心に、話題となった「コンフューザーR」や若手研修の様子をお届けいたしました。イタリア特集につきましては、次号でも第 2 弾を掲載予定ですのでお楽しみに！

～お問い合わせ～ 青森県りんご共防除連絡協議会 (事務局: JA 全農あおもり 営農部 営農技術課)

TEL: 017-729-8641 FAX: 017-729-8605 E-mail: bz240972@bz03.plala.or.jp